

# コミュニティプレイセラピー

コミュニティ・アプローチによる新しいプレイセラピー

押江 隆 山口大学教育学部 / 足立芙美 船橋市教育委員会 / 三浦啓子 山口県立山口総合支援学校 /  
水戸部準 広島少年鑑別所

Community Play Therapy

New method of play therapy with community approach

OSHIE, Takashi

*Faculty of Education, Yamaguchi University*

ADACHI, Fumi

*Funabashi City Board of Education*

MIURA, Keiko

*Yamaguchi Special Education School*

MITOBE, Jun

*Hiroshima Juvenile Classification Home*

(Received March 31, 2015)

## 要約

本研究では、筆者らが運営している不登校や発達障害などにより学校に困難を抱えている子どものフリースペースの活動について、その効果やファシリテーター、ボランティアスタッフの動きに関するこれまでの研究をレビューした。その知見をふまえてこの活動を「コミュニティプレイセラピー」として新たに位置づけ、今後の研究の課題を論じた。

キーワード：コミュニティプレイセラピー，フリースペース，コミュニティ・アプローチ

## I 問題と目的

筆者らが不登校や発達障害などにより学校に困難を抱えている子どものフリースペースをA市で開室しておよそ8年，B市で開室しておよそ3年になる。A市では市の市民センターの一室を，B市ではある大学施設の一室を借りて，どちらも月1回のペースでほぼ毎月開室している。これらのフリースペースには1セッションにつき1～10人の子どもに加え，1～2人のファシリテーター（以下“fac”と表記）や4

～6人のボランティアスタッフ（大学生や社会人などの地域住民。以下“vo”と表記）が参加している。facは毎セッションほぼ固定だが，子どもやvoの参加については常に各々の判断に委ねており，参加を強制することはしない。フリースペースで何をするかは全て子どもの主体性や自発性に任せており，学校への適応やコミュニケーション能力の獲得といった目標を設定していない。facやvoは子どもと一緒に遊ぶが，遊びを指示することはしない。仮に

子どもが一人遊びを始めても、集団で遊ぶよう指示することはない。子どもたちは何をしてもよいし、何もしなくてもよい。一人で黙々と持ち込んだ携帯ゲームを遊んでいたかと思えば、突如複数人でのボール遊びが始まることもある。一緒に遊びを楽しむ子どももいれば、他の子どもやvoの様子を楽しそうに眺めている者もあり、その様子は実に多種多様である(押江, 2009)。

参加を希望する子どもは保護者を介して、電子メールで事前に参加する旨を伝えてもらうようにしている。その際、子どもに「気になる点」があれば保護者にそれを知らせてもらっている。また、活動開始前と終了後には「スタッフミーティング」と称して、開始前には保護者から伝えられた「子どもについて気になる点」を共有する時間を10分程度、終了後にはその日の活動内容について気づいたことや困ったこと、感想などを自由に振り返り共有する時間を1時間程度設けている。スタッフミーティングにはfacとvo全員が参加する。voから活動に関する相談事があった場合、fac自らが率先して肯定的なフィードバックをするよう心がけている。voからも肯定的なフィードバックが起こり、全員でその問題に取り組み自由に意見を述べる、あたたかくて気さくな雰囲気でのミーティングである。押江(2012)は「スタッフミーティングは(facやvo)個々の多様な視点を共有する場として機能しており、当スペースの円滑な運営には欠かせないものとなっている」と述べている。

A市では保護者待合室を用意していた(押江, 2009)が、facを配置しなかったこともあり、利用者減により閉室に至っている。一方、その後開室したB市のフリースペースでは保護者待合室にfacを配置し、毎回1～5名程度の利用者がいる。そこでは保護者同士での子育て相談に加えて、持参したみかんをみんなで食べたり、ストレス発散のアイデアを互いに出し合った

り、共通の趣味の話で盛り上がりたりするなど、単なる相談の場を超えて、保護者にとっても一種のフリースペースとして機能している(三浦, 2014)。

押江(2009)はA市のフリースペースに関する事例研究と面接調査の結果から、治療や心理的成長を必ずしも志向しないフリースペースが「子どもが他者の意図や期待にとられることなく、自分が自分のままでいられる雰囲気」を有しており、「子どものありのままの姿を尊重し、さらに自らも遊びを楽しみ自由気ままに過ごすことを通して、子どもがそのままの状態で行われることを保障している」と述べた上で、これを「そのままいられる場」として位置づけている。しかし一方で、保護者から「フリースペースに来ると子どものチック症状が治まる」という声があったり、登校を再開した子どもがいたり、治療や心理的成長を志向していないとしながらも参加する子どもに治療的な過程がみられている。

また、これまで筆者らはこの活動を言い表すのに「フリースペース」や「居場所」といった用語を用いてきた。しかし、「“フリースペース”(または“居場所”)なのに月1回しかやってないんですか?」といった疑問の声があるなど、「フリースペース」や「居場所」といった用語はこの活動を表現するには不十分と思われる。

フリースペースに参加する子どもの保護者からは「子どもをありのまま取り繕うことなく堂々と見てもらえるのが本当に助かる」、「『大人が子どもに課題を課す場』が多い中、『子どもが自由にしたいことのできる場』があつて本当に助かった」といった肯定的なフィードバックがある。A市やB市以外の地域からの利用者もあり、他地域での展開を期待する声もしばしば聞く。地域からのニーズの高いこの活動を今後発展させていく上で、より適切に表現する用語が必要と思われる。

そこで本研究では「①本活動を新たに位置づ

けなおすこと」と「②今後の研究の課題を論じること」の2点を目的に、本活動に関連するこれまでの研究をレビューする。まず本活動の効果に関する研究を取り上げ、次に本活動における fac や vo の動きに関する研究を取り上げる。その知見をふまえ、他の臨床心理学的援助と比較しながら本活動を新たに位置づけなおし、さらに本活動に関わる今後の研究の課題を示したい。

## II 本活動の効果に関する研究

本節では本活動の効果に関する研究を取り上げる。フリースペースに参加する子どもにとっての効果を検討したもの（押江，2009；押江，2012；押江，2014；押江ら，2014），その保護者にとっての効果を検討したもの（三浦，2014），vo にとっての効果を検討したもの（押江，2012）をそれぞれみていく。

### 1. 子どもにとっての効果

押江（2009）は事例研究と面接調査から、フリースペースが子どもにとって「居心地がよい、楽しい」と感じられる「充実した無為を楽しむ場（小柳，1999）」であり、他者の意図や期待にとらわれることなく自分が自分のままでいられる雰囲気を醸成した「そのままいられる場」として機能していることを論じている。

また押江（2012）は事例研究から、フリースペースの子どもたちは自分のしたい遊びを介してゆるやかにつながっており、たとえ一人遊びをしてもそれが関係に開かれているため孤独感のようなものはみられないことを論じ、このような関係性を「遊び媒介ネットワーク」と呼んでいる。その上で押江（2012）は遊び媒介ネットワークが子どもにとって「一緒にいながら一人、一人でいながら一緒にいることのできる場（大石，2000）」を実現し、現代型不登校当事者の支援において重要とされる「①『自己領域（その人が自分自身であるという感覚を保持できている時間と空間）』が守られること」、「②『自己領域』を大事にし合える周囲と

の関係」、「③その関係に支えられて、自分から動けること」の3点（大石，2009）を可能としていることを論じている。このことと関連して、「フリースペースを利用するようになってから、適応指導教室に通い始めるなど、子どもに少しずつ動きが出てきた（押江，2009）」、「子どものチックが治まった（押江，2014）」といった保護者の声が報告されている。また押江ら（2014）は登校を再開した子どもがいると述べている。

さらに押江（2012）は vo の面接調査において「子どもに遊んでもらって癒される」、「子どもと一緒に遊んで童心に戻る感じがする」、「子どもを通してみんなと一緒にいられる」、「子どもに遊びを教えてもらおうと自分もすごいと思うし、子どもも『大人に教えてあげた』ことが嬉しいのではないか」といった声があったことを取り上げ、フリースペースでは子どもが「『自分は大人の役に立つのだ』という感覚を得ることができる」と述べ、これをエンパワメントの観点から論じている。

### 2. 保護者にとっての効果

押江（2009）は面接調査から、保護者がフリースペースに子どもを預けることで、保護者は安心して子どもと距離を置く時間を確保することができ、気分転換できるといった保護者の声を報告している。

保護者待合室の fac を務める三浦（2014）は事例研究において、待合室では子育て相談だけでなく好きなアイドルなど趣味の話題で盛り上がることもあることを報告し、子育て相談が中心の親の会とは性質を異にすることを示した上で、次に面接調査から待合室が「当事者性の高い、いろいろ説明をせずに話せて共感できる場」として機能していることを論じている。また三浦（2014）は、子どもを信頼できる場であるフリースペースに預けることによって、一時的とはいえ保護者が待合室で子どもの悩みから離れて自分の悩みや自分の趣味などに意識が向け

られるようになり、それを表出できるようになることを論じ、「子どもの悩み」が外れその上の「自分の問題」が「考える土壌」に下りてくるとする「だるま落としモデル」を提唱している。さらに三浦（2014）は、保護者待合室では子どもの問題から一時的に離れ、だるま落としのように自分のことが「考える土壌」に下りてくることで、自分のことを自分の話したいように話すことができ、それを通して保護者は「なんとなくやっていける感じ」が得られることを論じている。

### 3. ボランティアスタッフにとっての効果

押江（2012）はvoの面接調査から、voがスタッフとしての気負いを緩和し子どもと対等な一個人としてのメンバー化を果たすことで、voが子どもと同様に遊び媒介ネットワークに参加していく過程を論じ、フリースペースがvoにとっても居場所となっており、自由な風土の体験や心理的安全感を通してありのままにいられる自分を体験できる「そのままにいられる場」として機能していると述べている。

その上で押江（2012）はvoの「人との『ぼんやりとしたつながり感』が得られる」、「いろいろな人に会えるのが楽しみだ」、「いいつながりを持てた」といった「人とのつながり感」に関する声や、「人間的に惹かれ魅力的で尊敬できる人がいて、学ぶところが多い」、「周りからいい影響を受けている」、「様々な人との出会いを通して、自分の人間の幅を広げる経験になっている」など、フリースペースでの人間関係を良好にとらえており、そこから多くの学びを得ているとの声を報告しており、さらに「初対面の人との交流に抵抗がなくなってきた」、「日常生活で苦手な人とも話しやすくなった」、「子どもへの苦手意識がなくなった」といった「対人関係の改善」に関する声や、「子どもに対してよりも自分に対して気づかされるところが大きかった」、「いろいろな気づきがあり、人としての視野が広がった」といった「自分自身への気

づき」に関する声、「臨床心理士のイメージが変わり、自分の目指す像をイメージできるようになった」、「臨床心理士を目指す上で、いまの自分でいてもよいのだと思った」、「子どもとの関わりが心理学を学ぶ人間としてのあり方に気づかせてくれる」などの「対人援助を志す者としての成長」に関する声、「発達障害の子どもの実際を知ることができた」、「不登校の子どもが普通の子と特に変わらないことを実際に触れることで知ることができた」、「子どもは生きた教材だと思う」などの「当事者の実際を知ることができた」とする声があったことを報告している。

さらに押江（2012）はvoの面接調査から「子どもの役に立ちたい」といった声を報告し、フリースペースがその思いを遂げることのできる場として機能していると述べ、これをエンパワメントの観点から論じている。

## III ファシリテーターやボランティアスタッフの動きに関する研究

本節では本活動におけるfacやvoの動きに関する研究を取り上げる。facの子どもとの関わりに関するもの（押江，2009；押江，2012；押江・足立，2013b）、facのvoとの関わりに関するもの（押江・足立，2013a；押江ら，2014）、facの保護者との関わりに関するもの（三浦，2014）、voの子どもとの関わりに関するもの（押江，2012）をそれぞれみていく。

### 1. ファシリテーターの子どもとの関わり

押江（2009）は事例研究から、フリースペースでは「facの特定の行為が子どもの役に立つ」といった「因果律」ではなく、各場面に到来する「自然な成り行き（大石，2000）」に重きが置かれていることを論じている。

また押江（2012）はvoの面接調査から、facは『近所のおっさん』のように自然に「関わっており、「何も考えていない感じ」で「すごくリラックス」しているように見える」とのvoの

声を報告し、facがフリースペースに一個人として参加している一方で、「子どもが突然いなくなったときはひやっとし、facに指摘されてはじめてそれを知った」など「場全体を見渡す視点」をfacが有しているなどファシリテーションの機能を果たしていると述べ、facが「一個人としての参加」と「ファシリテーション」という互いに矛盾する機能を同時に抱えていることを論じている。

押江・足立(2013b)は事例研究から、facの子どもとの関わりとして「①中核条件の提供とプレゼンス」、「②子どもの実現傾向の信頼」、「③『場』の力の信頼」の3点を挙げている。

「①中核条件の提供とプレゼンス」について押江・足立(2013b)は、子どもの適応の促進などをまったく意図せずfacに自然と浮かんできた言葉を、どんな意味があるのかよくわからないながらも「これを伝えることには何か意味がある」と感じてそれをそのまま伝えた直観的な応答が、結果として子どもの適応を促進した事例を報告し、facがパーソン・センタード・アプローチにおけるセラピストの中核3条件、すなわち自己一致・無条件の肯定的関心・共感的理解(Rogers, 1986/2001)の提供に努めることで、fac自身にとっても声を発した後に振り返ってはじめて意味が理解されるような反省以前の(Ikemi, 2013/2013)な応答が生じること、結果としてfacにとっても「自然な成り行き」で「直観的に」感じられることを論じている。

「②子どもの実現傾向の信頼」について押江・足立(2013b)は、ある子どもが部屋を飛び出したとき、facは心配しながらもそれがその子どもにとって意味ある体験であるようにも感じ、その体験をそのまま尊重しながら関わることで、その子どもは自ら動き始め、他の子どもやvoとも過ごせるようになっていった事例や、ある子どもが年下の子どもに叩かれたり暴言を受けたりといったトラブルが生じた際、facが嫌な気持ちにさせたことを詫びながらもその子

どもの体験を丁寧に聴き取ることで、自らの過去の体験を振り返りながら相手について「自らをコントロールできないのではないか」と述べるなど一種の「見立て」を行うまでに至った事例を取り上げ、子どもの実現傾向に信頼を寄せ続けることがfacの役割であることを論じている。

「③『場』の力の信頼」について押江・足立(2013b)は、たまたまvoが近くを通りかかったことがきっかけとなって危機を脱した事例を挙げ、facは「場」の持つ力に信頼を寄せ、危機を脱する上で活用しうる場面が何かしら起こることを確信しており、その到来をある意味ではpassiveに待ちながらも、場のフェルトセンス(大石, 2000)の感じ取りをactiveに続けることで、ふと場面が到来したときそれを捉えて活用するような関わりが反省以前の生じること論じている。また、嫌な思いをした子どもの心労に対してfacだけでなくスタッフも労いの言葉をかけている事例を報告し、「皆が耳を傾ける『場』の持つ力は、その子どもにとって大きな支えとなったと思われる」と述べ、「場」の持つ力に信頼を寄せ、それを活かすことがfacの役割であると論じている(押江・足立, 2013b)。

## 2. ファシリテーターのボランティアスタッフとの関わり

押江・足立(2013a)は事例研究から、facのvoとの関わりとして「①voを守る」、「②ミーティングのファシリテーション」、「③場の読み取りと言語化」、「④自己成長力の信頼と促進」の4点を挙げている。

「①voを守る」について押江・足立(2013a)は「Axline(1947/1963)の『必要な制限を加える』原則がvoを守る上でも重要」と述べた上で、facが子どもの乱暴な振る舞いに制限を加えた事例やこの原則に基づく対応をミーティングでvoに伝えた事例を報告している。

「②ミーティングのファシリテーション」について押江・足立(2013a)は、子どもとうま

く関わられなかった vo の「もやもやとした気持ち」を fac が聴き取った事例や、vo が子どもに爪を立てて引っかかれた件を fac が話題として取り上げ、その対応について話し合った事例、fac が子どもとの関わりで苦労した vo の相談に応じ、その困難感を聴き取り、スタッフ全員と共有した事例を報告し、fac にはスタッフの相談に応じ、その気持ちを丁寧に聴き取り、全員と共有する場を設ける役割が求められることを論じている。

「③場の読み取りと言語化」について押江・足立 (2013a) は、「子どもとうまく関わられなかった」と不全感を示す vo が果たした役割を fac が伝えた事例や、子どもに傷つけられた vo をいたわりながらその関わりを振り返り、全体で共有した事例、子どもの乱暴な振る舞いの背景を理解し、vo に伝えた事例を報告し、fac には場全体を見渡し (押江, 2012) ながら子どもやスタッフの背景や心情、関わりなどを読み取り、それを言葉にして伝える役割が求められることを論じている。

「④自己成長力の信頼と促進」について押江・足立 (2013b) は、うまく子どもと関わられなかった vo の「もやもやとした気持ち」を fac が否定することなく尊重し、結果として「子どもと関わるのって、そんなに身構えなくても大丈夫なんだって思えるようになった」と述べ、子どもとうまく関わられるようになった事例や、vo が自身の子どもの関わり方を考えるきっかけを fac が提供した事例、ミーティングで子どもとの関わりに困難感を覚えた vo に対して fac だけでなく他の vo も適切な助言をした事例を報告し、vo の自己成長力を信頼し、自ら動き出せるような風土作りに努めることが fac の役割であることを論じている。

以上の 4 点に加え、押江ら (2014) は fac の第 5 の役割として「⑤『子どももスタッフも自由に過ごしていい』という雰囲気づくりや子どもへの必要な配慮について適宜話し合う機会

を設けること」を挙げ、vo 同士では切り出しにくいネガティブな話題であっても、fac は口火を切る役割を担っていると述べている。

### 3. ファシリテーターの保護者との関わり

三浦 (2014) は保護者待合室に関する面接調査から「fac は場の調整役を果たす」と述べている。しかし、fac の保護者との関わりに主眼を置いた研究はこれまでなされていない。

### 4. ボランティアスタッフの子どもとの関わり

押江 (2012) は「vo は子どもとテレビゲームやボードゲームなどで遊ぶこともあれば、一緒にのんびりとお菓子を食べていることもある。一人で黙々と折り紙を折ったり、落書きを始めたりする vo もいる。vo 同士でとりとめもない話をしている者もいる」と述べている。また押江ら (2014) は、テレビゲーム等では vo が時には本気で子どもに勝とうとすることがある一方で、子どもとじゃれ合う際には子どもが怪我や痛い思いをしないように、力を加減したり周囲に気を配ったりといった配慮をしていること、vo が一人で寝ていると、子どもが寝ている vo の顔にシャボン玉を飛ばしたりテレビゲームに誘ったりする場面がみられることを報告している。しかし、vo の子どもとの関わりに主眼を置いた研究はこれまでなされていない。

## IV 考察

### 1. プレイセラピーの新しいあり方の提示——「コミュニティプレイセラピー」

押江 (2009) は本活動が子ども中心プレイセラピー (非指示的遊戯療法; Axline, 1947/1963) と多くの共通点を有しながらも、本活動は無目的なものであり、治療を志向していない点でプレイセラピーとは異なると述べている。

ここで、古典的クライアント中心療法の立場に立つ Freire (2001) の、無条件の肯定的関心 (Unconditional Positive Regard; UPR) に関する論に着目したい。Freire (2001) は「変化するためには自分自身を受容しなければなら

表1 グループプレイセラピーとコミュニティプレイセラピーとの比較

グループプレイセラピー (West, 1996/2010)	コミュニティプレイセラピー
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 2人のセラピスト</li> <li>• 4人から7人の子ども</li> <li>• クローズドグループ</li> <li>• インテイク面接で得られた情報に基づく介入</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 1~2人のファシリテーター</li> <li>• 4~6人のボランティアスタッフ</li> <li>• 1~10人の子ども</li> <li>• オープングループ</li> <li>• インテイク面接をしない</li> </ul>

表2 フィリアルセラピーとコミュニティプレイセラピーとの比較

フィリアルセラピー (VanFleet, 1994/2004; Guerny, 2003/2011)	コミュニティプレイセラピー
<ul style="list-style-type: none"> <li>• 非専門家(親・里親・大学生など)が関与</li> <li>• セラピストによる訓練・指導</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• 非専門家(大学生・大学院生・社会人など)が関与</li> <li>• 訓練を行わない。ボランティアスタッフもメンバーの一員であり、セラピストとしてふるまうことを期待されない</li> <li>• スタッフミーティングの重視</li> </ul>

ない」というパラドックスがUPRにはあること、クライアント中心療法のセラピストはクライアントを変えようとせず、その目標が体験の無条件の受容にあることを論じ、(子ども中心の)プレイセラピーについても同様であると述べている。「子どもが他者の意図や期待にとらわれることなく、自分が自分のままでいられる雰囲気醸成」し、「子どもがそのままの状態にいられることを保障(押江, 2009)」しようとする本活動は、Freire (2001)の言葉を借りれば子どもを変えようとせず、その体験を無条件に受容する場を提供しようとする試みであるといえる。このように考えると、本活動の「治療を志向しないながらも治療的である」という、一見パラドキシカルな特徴は、子ども中心プレイセラピーのUPRが包含するパラドックスをそのまま継承したものといえよう。

では、本活動をプレイセラピーの一種とするならば、これをいったい何と呼べばよいのだろうか。筆者らはこれを新たに「コミュニティプレイセラピー (Community Play Therapy; 以下“CPT”と表記)」と呼ぶことを提案したい。CPTは、「個の変容だけでなくコミュニティの変容をも目指し、地域コミュニティの中で専門家だけでなく非専門家も支援に参加する体制作りを行うことで、コミュニティが人を支える力

を取り戻したり新たに獲得したりすることを目指すための一連の方法論」である「コミュニティ・アプローチ(押江, 2012)」によるプレイセラピーの一種であり、臨床心理士に求められる臨床心理的地域援助の新しい方法である。

## 2. コミュニティプレイセラピーと他のプレイセラピーとの比較

複数の子どもが参加するプレイセラピーとしては「グループプレイセラピー」がすでに知られている。しかしグループプレイセラピーは「2人のグループセラピストが入り、4人から7人の子どもをみる」という形態を取り(West, 1996/2010), 「1~2人のfacと4~6人のvo, 1~10人の子どもが参加」するCPTとは異なる。また、グループプレイセラピーのグループはクローズドな構造であり、セラピストや子どもが入れ替わることはめったにないが、CPTではfacは固定しているものの、利用者(子ども・保護者)とvoは固定せず流動的であり、入れ替わることも多い。さらに、グループプレイセラピーではインテイク面接で得られた詳細な情報に基づく介入がなされるが、CPTでは毎セッションの事前に保護者に「気になる点」があればそれを知らせてもらう程度で、インテイク面接は特に実施されない(表1)。

また、非専門家がプレイセラピーに関わる

方法として「フィリアルセラピー (VanFleet, 1994/2004 ; Guernsey, 2003/2011)」が挙げられる。フィリアルセラピーでは専門家による訓練・指導のもと、親や里親、大学生などが子どものプレイセラピーを行う。CPTでも同様に、大学生や大学院生、社会人などの非専門家に関わるが、専門家による訓練は行われない。CPTにおいてvoは子どもと対等な一個人のメンバーとして位置づけられ(押江, 2012), プレイセラピストとしてふるまうことを期待されない。その代わり活動終了後に実施されるスタッフミーティングを重視し, その中でfacはvoの振り返りを丁寧に聴き取り, 必要に応じて助言するようにしている(押江・足立, 2013a)(表2)。

### 3. コミュニティプレイセラピーの利点と欠点

先にも述べたように, CPTでは子どもやvoの間に遊び媒介ネットワークが形成され, voが子どもを支えるだけでなく子どもがvoを支えることもある, 相互交換的な支援関係が成立する(押江, 2012)。このようなネットワーキングやエンパワメントは他のプレイセラピーにはみられない。これは, コミュニティ・アプローチによるプレイセラピーであるCPTならではの特徴といえよう。

また, CPTではインテイク面接を実施しないこと, 市民センターや大学施設の一室などのいわゆる心理相談室ではない場所で実施していること, 電子メール1本で参加できる手軽さがあることから, アクセシビリティの高さもCPTの利点といえよう。また, フィリアルセラピーでは親などのセラピスト役に「セラピーに臨もう」という心構えが求められるが, CPTではvoが複数参加しており, 遊び媒介ネットワーク(押江, 2012)に支えられてvoが子どもとの関わりで困ったことがあったときでも「他の人が助けてくれるだろう」というような安心感が生じるため, 「セラピーに臨もう」というような構えなしに, 気軽に参加できる場に

なっていると思われる。

一方で, 他のプレイセラピーと比べてCPTには子どもの課題を集中して追いかけていく, 母子分離ができない子どもなどは参加しづらい, 子どもやvoが流動的でしばしば入れ替わるため, 子どもやvo間の関係をつかみにくいなどの欠点もあると思われる。

### 4. 今後の研究の課題

これまでの研究からCPTが子どもに「そのままいられる場」を提供することが論じられているものの, このような場が子どもに何をもたらすか十分に検討されていない。押江(2009)はA市のフリースペースの意義を検討するにあたって「面接調査などにより, 当スペースの意義について子どもたちから直接聴取することができれば, それがもっとも望ましい方法であろう。しかし, 子どもたちのほとんどが小学生であり, 体験の言語化が難しいことが予想されるため, 面接の実施は困難と判断した」と述べ, 「次善策として」事例研究と保護者の面接調査を実施している。しかし, 開室しておよそ8年にもなるA市の子どもが多くが成長し, いまでは体験の言語化も可能になっていると思われる。今後の研究ではCPTの意義や効果を検討する, 子どもの面接調査が必要であろう。

また上にも述べたように, 「facの保護者との関わり」と「voの子どもとの関わり」についてはそれぞれを主眼においた研究がこれまでなされていない。「facの保護者との関わり」については事例研究が, 「voの子どもとの関わり」については事例研究やvoの面接調査が今後求められる。

さらに, CPTではvoの訓練を行わない代わりにスタッフミーティングを重視しているが, スタッフミーティングそのものを主眼に置いた研究はこれまでなされていない。今後はスタッフミーティングでどのようなやりとりがなされ, それがvoにとってどのように影響しているかを検討する, 事例研究や面接調査が必要で



あろう。

## 謝辞

本論文は日本人間性心理学会第33回大会(2014)にて発表したものに加筆・修正を加えたものです。座長の労をおとり下さり、さまざまなご助言をいただいた九州大学の高松里先生に厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

- Axline, V. M. (1947). *Play therapy*, Boston: Houghton-Mifflin. (小林治夫 (訳) (1963)『遊戯療法』岩崎書店)
- Freire, E. (2001). Unconditional Positive Regard: The distinctive feature of Client-centred Therapy. In Bozarth, J. D. & Wilkins, P. (Eds.), *Rogers' Therapeutic Conditions: Evolution, Theory and Practice volume 3: Unconditional Positive Regard*, Ross-on-Wye: PCCS Books, pp.145-154.
- Guerney, L. (2003). Filial Therapy In Schaefer, C.E. (Ed.) *Foundations of Play Therapy*, Wiley. (串崎真志 (監訳) 畑中千紘・羽野 (謝) 玲糸・野口寿一・佐々木麻子 (訳者代表) (2011). *プレイセラピー 14 の基本アプローチ——おさえておくべき理論から臨床の実践まで* 創元社)
- Ikemi, A. (2013). You can inspire me to live further: Explicating pre-reflexive bridges to the other. In J. H. D. CorneliusWhite, R. Motschinig-Pitrik, M. Lux. (Eds.). *Interdisciplinary Handbook of the Person-Centered Approach: Research and Theory*, New York, Springer. (筒井優介・橋場優子・宮本一平 (訳) 池見陽 (監訳) (2013). 他者への反省以前の架け橋を言い表す——僕が生き進むことを君は促してくれるのか サイコロジスト: 関西大学臨床心理専門職大学院紀要, 3, 11-20.)

- 三浦啓子 (2014). 学校に困難を抱えた子どものフリースペースの保護者待合室における実践的研究 山口大学大学院教育学研究科修士論文
- 押江隆 (2009). 地域における無目的志向のフリースペースの意義——「そのままいられる場」としてのフリースペース 人間性心理学研究, 27 (1・2), 45-56.
- 押江隆 (2012). 相互援助コミュニティの心理臨床モデルに関する実践的研究——パーソンセンタードアプローチの新たな展開としてのコミュニティアプローチ 関西大学大学院心理学研究科博士論文
- 押江隆 (2014). 教育相談と地域臨床 田邊敏明・大石英史・沖林洋平・小野史典・押江隆 (著) 明日から教壇に立つ人のための教育心理・教育相談 北大路書房 pp 155-167.
- 押江隆・足立英美 (2013a). 学校に困難を抱えた子どもの居場所活動における心理臨床家の果たす役割——ボランティアとの関わりに着目して 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集, 224.
- 押江隆・足立英美 (2013b). 学校に困難を抱えた子どもの居場所活動に関する研究 (I)——心理臨床家の子どもとの関わりに着目して 日本人間性心理学会第32回大会発表論文集, 120-121.
- 押江隆・足立英美・三浦啓子・水戸部準 (2014). コミュニティプレイセラピー 日本人間性心理学会第33回大会発表論文集, 94-95.
- 大石英史 (2000). 病者とのかかわりのなかで生起する「治癒の場」 心理臨床学研究, 18 (3), 233-242.
- 大石英史 (2009). 「現代型不登校」の理解と援助 大石由起子 (編著) 青年期の危機とケア ふくろう出版 pp42-58.
- 小柳晴生 (1999). エンカウンター・グループの現代的意義, 現代のエスプリ, 385, 187-195.

- Rogers, C. (1986) . A Client-centered / Person-centered Approach to Therapy. In Kuash, I. & Wolf, A. (Eds.) , *Psychotherapist's Casebook*. Jossey-Bass, pp197-208. (中田行重 (訳) (2001) . クライエント・センタード／パーソン・センタード・アプローチ H. カーシェンバウム・V.L. ヘンダーソン (編) 伊東博・村山正治 (監訳) ロジャーズ選集 (下) 誠信書房 pp162-185.)
- VanFleet, R. (1994) . *Filial Therapy: Strengthening Parent-Child Relationships through Play*, Sarasota: Professional Resource Press. (串崎真志 (訳) (2004) . 絆を深める親子遊び——子育て支援のための新しいプログラム 風間書房)
- West, J. (1996) . *Child-Centered Play Therapy*. 2nd ed. London: Edward Arnold. (倉光修 (監訳) 串崎真志・串崎幸代 (訳) (2010) . 子ども中心プレイセラピー 創元社 pp90-127.)